

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Nov. 30th, 1959, No. 333.

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十四年十一月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻三三三号

關西大學學報

昭和34年11月 第333号

關西大學

本学(大阪)言試験

言 試 験 期 日	法 学 部 一部 二部	2月21日
	商 学 部 一部 二部	〃 22日
	文 学 部 一部 二部	〃 23日
	経 済 学 部 一部 二部	〃 24日
	工 学 部 一部のみ	〃 25日
	地方言試験 法商文経工各学部	〃 21日

地方試験地 高松・福岡・広島・金沢・名古屋

●願書受付 1月19日まで

詳細は学芸部募集要項を以下で、(観望科総合門)

関西大学学務局 大阪府吹田市千里山

学 生 募 集 ポ ス タ ー

關西大學出版部

研究機関としての大学と研究所

合 田 熊 平

経済政治研究所嘱託

科学の進歩と研究機関

およそ科学は普遍的なものであつて、一民族特有の科学というが如きものは考えられなく、科学は人類共同の所有であり、人知によつて間断なく進歩發展して止まぬものである。科学の進歩は学徒が先学の業績の上に立つて、これに新たな研究成果を累積して行くことによつて、その發展が期せられ、また個人・民族間・諸社会の間における研究協力によつて、ますますその成果を向上せしめるものである。科学研究における時間的・空間的孤立は、科学の進歩を遲滞せしめ、その發展を阻害せしめる。であるから、学徒は有効に活動し無用の勞を省くために、一方では前代の文献を渉獵して、先学の業績を知悉することに努め、また他方では国の内外を問わず、常に世界的視野に立つて、研究進行の現況に絶えず接觸していることが極めて必要なことである。ところが、このことは今日のように科学が進歩發達し、その知識量が増大している時代においては、それに伴つて専門關係の圖書・資料・情報・連絡等も尨大な量となり、その質もまた複雑多様を極め、これら古今東西の文献類を遺漏なく収集し整理し加工し研究するということは、もはや個人の力

を以てしては、到底不可能のことであり、よし大規模な組織を以てするも、なおかつそれは容易なことではないのである。

他方、前代の科学の研究方法是、主観的であり思弁的であり抽象的であり演繹的であつたのであるが、近代科学のそれは客観的・帰納的・実証的・実験的に、その研究方法が轉移しており、そのために、広く事実を調査し、多くの資料を駆使し、多数人の相互協力が要請せられるに至つたのである。なおまた、前代欧州において、ほど完成の域にまで到達した社会諸科学が、その進歩發達するに従ひ、次第に専門化し分化して、遂に個々に孤立するに至つたために、その専門分化に対する反省・反作用が、近代になつて主として米國において起つて來たのである。そのために、從來の分業化に対して、これを一体として、総合的把握が強調せられることになつた。問題の総合的把握は、多くの専門学者の協力が要請せられることである。殊に第二次大戦以來米國においては、交戦地域の民族文化を總體的に把握せんとする地域研究が極めて盛んになり、多くの大学に地域研究の講座・研究所が設置せられたのであるが、社会・人文・自然諸科学の総合的研

究によつて極めて好成績を上げ得て、米國の戦略策戦の遂行に大なる貢獻をなしたのである。なお戦後も新しい科学の研究方法として、この地域研究はますます重要視せられている。こうした科学研究の傾向は、いよいよ以て大がかりな研究施設を必要とするに至つたことは勿論であり、自然科学の研究実験設備も無論そうであるが、客観的な事実認識の上に立つとする社会科学の研究においても、また統々刊行せられる圖書・広範に亘る歴史的資料・各種各様の統計・氾濫する諸多の調査報告・大量の雑誌新聞・諸方面よりの情報等々の収集、その整理加工、場合によつては、みずから進んで社会調査を実施すべき必要もあり、かくして有効な調査研究を行うためには、資料部・企画部・調査部・統計部・編集部・総務部等の諸組織と、研究室・資料室・資料庫・閲覧室・統計室・新聞室・整理室・編集室・印刷室・集会室・事務室等の諸設備、並びにこれが運用にあたる多数人、即ち多くの研究員の外に、圖書係・資料係・分類係・目録係・統計係・新聞係・編集係・研究助手・計算技術者・タイピスト・マイクロフィルム係・筆耕・事務者その他を含む、ここに一大研究組織を必要とするようになってゐることである。

このように、近代科学の傾向が又その研究方法の變革が、総合的・協力的大組織を要請している事実と相まつて、實際方面でも、高等教育の振興普及によつて研究適格者が増加したこと、科学の協力的研究の要望などが、その人的条件を充足するに至り、他方では、國家の興隆・企業の繁盛・産業の國際的競争のために、科学的研究の緊要な所以を痛感するに至つた國家と企業とが、これに資金を投入して、その物的条件をもまた充足するに至ることによつて、近代科学研究の

要請である、上記の如き傾向に即応して、組織的研究機関が急速に実現化されつつあることである。

次に米国における社会科学系統の研究機関が、近代になつて飛躍的發展を遂げ、その機能が社会生活と密接に連係し、正に国民生活の羅針盤としての役割を果しつつあるので、その發展過程と社会的的重要性について、以下簡単にうかがつて見たいと思う。

米国における調査研究機関の趨勢

調査機関の發達は歴史的には、欧州の仏独英伊等の諸国に早く見られたのであるが、米国におけるこ四、五十年來の社会科学系統の調査研究機関の發達には驚異すべきものがある。調査研究機関といつても、その中には大学付属の研究所もあれば、政府の調査機関もあり、民間諸団体の持つ研究所、また大会社・大銀行にもそれぞれ附属調査機関があつて、その数も非常に多く、それぞれ果している役割も違つているが、民間独立の機関が重要な地歩を占めているのは、これは米国社会の特質、国民性によるものであらうか。

民間調査機関の發生は、近代科学の研究方法の變革、即ち問題の総合的把握と広範な事物調査から、極めて大組織機関を必要とするがために、政府機関・大学附属研究所等も民間調査機関に対する依存度が増大し、又大企業もある種のもは専門機関の調査研究に是非とも頼らねばならぬ場合が多く、かくて民間機関が政府機関等の活動をいわば補完し代弁する役割を持ち、民間機関の調査研究の發展を促す原因をなしている。

一九一九年に初まつた戦後の大恐慌につづいて、ルーズベルト大統領のニューディール政策は、学者に科

学研究の経験と社会科学の分析を恐慌処理のために役立たせることが求められた。こうして實際政治への参画は、いきおい、学者に現實社会問題の認識を高めさせるとともに、一般社会にも学者の果すべき役割と能力について、その評価を高からしめるものがあつた。かく第一次大戦が現實問題の社会科学研究的組織化に与えた刺激はまことに大なるものがあり、調査機関は画期的躍進を遂げ、例の National Bureau of Economic Research を初め多くの社会科学の専門調査研究機関の創設を見るに至つたのである。

又大戦の惨禍により各国民は平和を希求して止まず、再び戦争を起さしめぬよう、國際問題を社会科学的に調査研究しようという目的にて、國際關係の調査研究機関が各国に設立せられ、その代表的なものとしては、英の British Institute of International Affairs 米の Council on Foreign Relations 等がその主なものであり、政府も国民も人類社会の繁栄のためには、正しい事實認識の上に立つて合理的な行動をとるとき、初めて平和は達成せられるものであるとの信念の下に、米国におけるこれらの機関は、特に一般人の國際關係・外交問題に関する知識の普及と啓発に専ら活躍したものであつた。

大学が依然として現實問題の処理を輕視して、象牙の塔に閉じこもりがちであつた間に、いつの間にか民間調査機関が生れて、事實問題の調査に乗り出し、着実に良い業績をあげることができた。大学がこうした民間機関の發展に対して、いち早く目覺めたことは、今日の米国の大学なり学者が、現實社会の諸問題の調査研究に積極的な関心を示していること、これは米国学界の眞証性を重んずる科学研究の特長であり、また、大学の社会的意義が他のいかなる国よりもすぐれて高きといふこと、これは国民の科学尊重の理念に因る、

ことを説明する共に美点といわなければならない。

この米国における科学研究方法の特色と国民の科学尊重の精神とが、米国における大学・研究所の研究活動を助長せしめ、以て研究業績を豐饒たらしめている所以であつて、このことは、次の財団の活動とも連がりを持つものである。ハーバード大学の Bureau of Business Research 及び Committee on Economic Research ニューヨーク大学の Bureau of Business Research スタンフォード大学の Food Research Institute 等を初め、今世紀初頭より多くの大学に続々研究機関が設立せられた。

かてて加えて米国における財団の活躍である。財を持つたものは、それを社会公共の福祉のために喜んで提供しなければならぬという考え方は、私財を諸々の博愛・教育・研究・啓蒙活動に投ずることに躊躇せず、これが米国の大学・研究所等に力強い支援を与え、今日の如き米国の調査研究機関を發達せしめた大きな原因をなしている。第二次大戦後調査機関の發展とともに、財団の發展もまた注目されるべきものがあり、フォード、ロックフェラー、カーネギーの三巨大財団を初め、現在大小その数は一万の多きに達しているといふ。そして社会科学・自然科学・人文科学の基礎研究的なものに対しては、財団から研究費の援助が行われているが、このことは一般産業界の調査研究に対する認識が高いためであり、それは企業経営が調査活動に負うところが多いことから來ているのであつて、これは正に企業経営と調査活動との一体化の傾向を意味するものと言えるであらう。財団からのこうした支援がなければ、米国の調査機関は今日の如き躍進はとても期待できなかったであらう。わが国においても、先般公表せられた藤原科学財団の設立の如き、わ

が産業界に対する高らかな警鐘ではあるまいか。又今秋には科学技術関係諸団体によつて、全日本科学技術振興財団が結成せられることに話し合いが進められたのである。

第一次大戦後における大恐慌の教訓から、第二次大戦に際しては、戦時中から戦後経済の在り方について、政府民間の間で熱心な討議がたたかわされ、特に民間の社会科学関係の調査機関では、例のマーシャル・プランで有名なポール・G・ホフマン氏等の主宰する Committee for Economic Development の如き最も活躍したものであるが、こうした動向を反映して、戦時経済から平時経済への転換に伴う諸問題の調査研究が行われ、産業界に対して、平和産業へ切換えの指導も盛んに行われた。この科学的調査研究が、その客観性と正確さのために、戦後の不況が見事に回避されたばかりでなく、生産は高水準を、また生活水準は高度に維持せられ、社会一般から寄せられた調査機関に対する信頼は実に非常なものであつた。また米国の経済を動かしている社会的政治的要因について、従来見られなかつた長期的観察が、実業家の間でも盛んに行われ、長期計画が立てられるようになった。即ち、景気変動に対するフォアキャストからプロジェクトンへ、また分析技術の進歩により、短期分析から長期分析へと進歩発展しつつあるのである。National Bureau of Economic Research や National Planning Association などの民間機関も、盛んに長期観測の資料を提供している。

今日米国では既に調査機関は立派に企業として成り立つまでに発達した。一般企業の経営も調査研究の裏付けがあつて、初めてその繁栄が期待できるといつた時代になつてゐる。民間の企業が調査研究に異常なほ

どの熱心さを示していることは、調査研究を通じて企業が多大の利益を享受しているからである。こうした企業的調査機関としては Stanford Research Institute の如き大規模のものを初めとしていくつが存在するが、何れも民間企業・政府諸機関からの要求に応じて、コマーシャル・ベシスで調査研究を引受けている。米国では科学・技術の研究こそ、最も利益のあがる投資であると考えているから、このような企業的な研究所は将来ますます発展して行くことであろう。

以上は近代における米国の調査研究機関の趨勢であり、当然、やがては、いつかは、その足蹟を辿るべき運命にあるわが調査機関のために、その発展の跡を振り返つて見たのであるが、速歩を以て先行する米国に、わが機関が遅足これに追従せねばならぬ悲哀を感じざるわけには行かない。米国が第二次大戦後の不況を回避し得て、生産の高水準と国民の高い生活水準を維持し、経済的繁栄を謳歌していることは、凡ては科学的調査研究の賜であつて、企業も国家も調査研究の結果に基づいて運営せられてゐるためである。同国民の調査研究に対する熱意と努力は、更に将来の国運の隆昌を約束するものであり、他国のとても追従を許さぬものとなる。これら大調査研究機関が行つてゐる広範かつ総合的調査が、現在米国の国策樹立のために、その政治外交に対していかに大きな役割を果し得てゐるかは、容易に想像できることである。これら諸政策は事の重要性如何を問はず、常に着実に客観的な調査研究によつて裏付けられてゐる。従つて、その施策に対しては、常に自信に満ちており、そこには、国民は何等の不安も持たなければ、何等の焦燥も感じないわけである。

わが国の大学の研究機能

科学研究の独立的機関といへば、それは大学と研究所であるが、歴史的には大学はその設立において研究所よりも遙かに古く、のみならず、現在でもその社会的重要性においては、なお研究所を凌駕していると見るのが妥当であらう。けれども、科学研究の盛んな米国の如きにおいては、前述したように、近代になつて、独立研究所として或は大学附属研究所として、大規模な研究所が統々設立せられ、その研究活動は極めて旺盛であつて、科学研究の重心が次第に大学から研究所に移動しつつあるように見受けられるのである。研究の中心が大学から研究所に移動せんとする根本原因は、それは大学が持つ使命の二重性から来ているのであつて、大学が持つ二大任務とは、それはいうまでもなく研究と教育とであり、研究の面では一定計画に基づく研究そのものの遂行と次代の研究者養成を目的とし、大学においては「教授は学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する」ものであつて、即ち、主として科学研究を通じて教育が行われるのである。この研究と教育との二つの任務は、一定の条件のもとでは互に競合せぬどころか、かえつてその効果を高め合うものであるが、往々にして背離相剋を免れ得なくして、時には教育機能の方が強力に作用し、それに多くの時間と精力を傾注しなければならず、それがために、その本来の使命である研究機能を低調ならしめることがある。わが国における現状の如き、正にその傾向を多分に持つものと思われるのである。現在わが大学においては「広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする」ものであるが、大学の量的に繁栄する反面、質的にはその稀薄となるを免れることができず、その上に、一般教養と職業教育を

重視する高等教育機関として、ますます増大する教育的任務と、それに伴う行政的任務との重圧によつて、本質的な使命である研究的任務の遂行がさぶる困難になつてゐる事実である。加うるに、敗戦後の経済的窮乏と、かような事態のもとにおいて、研究設備も不備不完全であり、研究費も乏しく、そのために研究活動もおのずから低調ならざるを得ない事情に在る。にもかかわらずにも、現在多くの大学においては、講義負担の重課する上に、種々の行政的義務も附加されて、研究のための時間と精力をさえも減殺されるような状態におかれてゐることである。この実状は特に私立大学において、その感が深いように見受けられるのである、故に大学においては、研究活動に対する刺激も乏しく、纏まつた研究も行われ難く、いきおい、大規模な組織的研究の如きは、研究一本建の研究機関である研究所においてのみ行われるようになるであらう。かくては、少壮有為の研究者は大学に留まるよりも、むしろ研究所に運命を托して、その将来を開拓するに至るであらうし、大学における研究機能はいよいよ低調の道を辿らざるを得ないこととなる。要するに、大学においては「教授は担当する専門學術の進歩並にその教育に対し責任を負う」べき重責にありながら、又研究の深化なくしては、真の大学教育はあり得ないと思われるのであるが、現状におけるわが国の大学は、前述したように、教育機関としての性格が、戦前の大学よりも遙かに強く、これに反して、研究機関としての機能はますます劣弱となり、ために、研究意欲を萎縮させ、創造的研究を遅緩せしめてゐることである。

戦前の大学は「國家に須要なる學術の理論及応用を教授し並其の嚮奥を攻究することを目的とし」たので

あるが、現在は大学院において「學術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて、文化の進展に寄与」せんとするものであつて、戦前の大学とはほぼ同様な研究機能を持つこととなつており、大学院において、主として研究機能を高揚せんとするもののである。現在、大学は多過ぎるほど多く存在するのであるから、それらの中、比較的研究施設の整つた、大学院を持つ大学を、更にその施設を充実して大学院大学に改組し、研究機関としての大学の使命を果すようにすることも一法ではなからうか。更に又その大学院の持つ特色ある研究面を發達せしめて、附置研究所とすることも考えられる。米国においても一流大学では、ハーバード、コロンビア、シカゴ等の大学を初めとして、何れも大学院を主とした大学に漸次変容しつつあるようである。

大学 附置 研究所

かくして、現在のわが大学が、研究機関としての機能が劣弱となつて、以て高等教育機関化しつつあり、かくては、やがて、大学は研究機関からしめ出しを喰つてしまひ、ついには、学生の教育機関に過ぎないものに転落するかも知れない。かような事態に処して、科学・技術の振興、國家社会の進運のために、この致命的失陥を補充し、その創造的研究の機能を保持・発揚せんとする地位に在る組織は、ひとり研究所のみであつて、ここに大学に研究所の附置を要望し、以て、学内における研究機能を補充・拡充せんとする所以があるのである。研究所を附置することによつて、社会科学部門の大学においては、本来行ふべくして、容易に行ひ得なかつた実証的研究が、研究所の任務としてい

きおい研究所に推移し、そのおかげで、実証部門に割くべき精力と時間を他に傾注することができし、また、研究所における多様な実証的調査研究の成果ならびに収集せられた貴重な各種の資料等は、大学教授のみならず、大学院学生・学部専門課程学生等にも遺憾なく利用せられ、なお従来資料の収集整理に要した煩勞は省略せられ、大規模の多数人の協力を要する調査研究の如きも、その施設を持つ研究所に専ら依存寄頼することができ、附置研究所によつて大学が享受する利益は想像以上に大なるものがある。要は、社会科学研究の最も主点とする実証部門の研究は、附置研究所において専ら行われ、大学においては、研究所における実証的研究と相互関渉のもとに、社会科学の理論的・哲學的研究が主として盛行されればよく、大学における研究負担も、附置研究所の出現によつて相当軽減せられるというものである。一方、附置研究所では、教育的任務からは解放せられ、そのために従来避け得なかつた時間と精力の消耗と、研究の自由に対する拘束をも免れて、大学より分化して、ひたすら研究調査に精進没頭することができるのである。かくて、大学における研究機能の低調に対し、わが国においても、大学の内外において、近時各種の研究の続々設立を見つゝあることは、当然の趨勢であるとはいへ、まことに喜ばしい現象といわねばならぬ。

社会科学部門にあつては、大学における資料室・調査室・演習設備の整つた研究室等の設備は、学内附置研究所の歴史的段階であつて、これがより大規模の組織となり、調査研究を主とする施設として、設備・要員・財政・制度の上で一定限度の独立性を獲得するに及んで、いよいよ研究所に成長することになるのである。尤も、その成立も大学自体が実証部門の研究の必

要を痛感し、その創意によつて設置したものと、また特志家の厚意によつて創設費を、時によつては将来の維持費をも併せて大学に寄付され設立せられたものがある。何れにしても、大学にとつては、在来の事情の下においては、経費その他の関係から、とても企及し得なかつた研究施設の提供を受け、且つ多くの場合、物的設備に伴つてスタッフをも増員することができて、研究機関としての大学の、その機能的欠陥を補充して行くことができるのであるから、まことに喜ばしいことで、大いに多しなればならない。また、独立研究所としては、おそらく得がたいであろうところの、有能な研究員又は研究指導者をば、兼識者としてではあつても、大学より迎え得られる利点もある。しかし、この利益と表裏して、そうでなくとも、研究を困難ならしめるおそれのある過重負荷の大学教授に、より以上の負担を加重することになるのであるから、兼任研究員に多くを期待することは無理ではないか、という悲観的見方を持つ者も多いようである。何はともあれ、大学附置研究所が有効に活動し、以て研究業績を上げるためには、所長に人を得、所長の創意を中心として、その持ち味を十分生かし得られるよう、研究員の協力が必要であり、又調査研究に欠くことのできない資料の整備に傾倒すること、なお、この施設をできるだけ大学の教育的・行政的負担煩累から解放するとともに、専任研究員の数をできるだけ増員することが極めて望ましいことである。

終りに

要するに、大学は世界の科学水準に遅れをとらないように、わが国の科学・技術を指導し、また各分野に

絶えず新しい研究者を供給して行く重責を持つものであるから、その研究機能の重要性を真箇に認識し、以て研究施設を改善充実すること、一歩進んで附置研究所を持つことは、科学振興の根本的問題であり、大学自身の成長のため、引いては文化国家建設への進展のため、考慮の余地の存しない、緊切かつ重大な問題である。とにかくにも、科学・技術の基礎的研究は、大学ならびに研究所に課せられた重要な責務であるが、それだけに、このことは無論大学だけで解決し得られる問題ではなく、事は一国の経済自立・国民福祉の増進につながる重要な要素であるから、従つて、文部省・科学技術庁・日本学術会議・新発足の科学技術会議等において、国民の共感を得、その支持のもとに、学産業界の知能を結集して、科学・技術振興のために根本的な長期計画を立てる必要があるのではあるまいか。由來、わが国には早々に解決さるべくして、なかなか解決に至らない、多くの問題が残されておき、本問題の如き、その中でも最先に善処さるべき、一国の盛衰浮沈に関する最大の問題である。問題の解決は常に科学的検討の上に立つてなされるべきであり、解決さるべき多くの問題を持つが故にこそ、科学研究はますます振興されねばならないのである。かくて早く発足した者はそれだけ、より早く目的地に向つて先行し得ることは自明のことであり、今日時かれた種子は将来図り知れない収穫をもたらすものと信ずるものである。科学・技術の振興は民族繁栄の至上命令である。大学における科学研究を推進するために、ここに特別な研究施設を持つた附置研究所の必要を要請して已まぬ所以があるのである。

学会便り

国際経済学会第二回関西総会

十一月三日(火) 国際経済学会第二回関西総会が本学千里山第三学舎で開催された。当日は悪天候にもかかわらず、早朝より学会員約七〇名が参集し、夕刻六時過ぎまで熱心なる報告と討論が続けられ大いなる成果をおさえた。総会プログラムはつぎのとおりであつた。

午前の部

- 一、開会の辞 準備委員長 本学 安田 信一
- 二、研究報告 座長 神戸大学 藤井 茂
- 1、国際貿易理論におけるソニア・プログラミングの適用—ラーナーのばあいについて— 本学 山本 繁輝
- 2、要素存在量、生産技術および比較生産費 神戸大学 天野 明弘

午後の部

- 3、後進国開発計画と投資基準 大阪市立大学 名和 統一
- 4、日本綿織業展開期における貿易政策思想 大阪外国語大学 梅津 和郎
- 5、国際移住の経済理論 神戸外国語大学 金田 近二
- 一、閉会の辞 理事会代表 神戸商科大学 谷口 重吉

なお、当番校としての準備その他は、商学部安田信一教授の指導のもとに進められ、本学所属学会員全員がそれに当り当日多数の協力者を学内よりえたことは何よりの幸であつた。最後に本学からの出席者名を示せばつぎのとおりである。経済学部 森川太郎、中川庸太郎各教授、山本繁輝助手、商学部 安田信一教授、来住哲二、木村滋、瀬尾美巳子、吉信爾各専任講師、杉本昭七助手。

学内報

四 大 学 懇 談 会

月例の四大学懇談会は、十一月十八日(水)午前十時より千里山大学ホールで開かれ、当面する大学問題について種々意見の交換が行われた。

出席者(順序不同、敬称略)

関西学院大学 学長 堀 経夫、庶務課長 池田良雄
同志社大学 理事長 泰孝治郎、庶務課長 教野次郎
立命館大学 総 長 末川 博、人事課長 柳田規暎
本学 理事長 神毛資寿忠、学長 矢口孝次郎、専務理事 久井忠雄、学務局長 池田信之助

大 学 院 幹 事 更 迭

大学院文学研究科幹事金子又兵衛教授(文学部)の任期満了に伴って、後任に末永雅雄教授(文学部)が推薦された。

中谷敏寿、森川太郎両教授

日本学術会議会員に当選

学会の総選挙というべき日本学術会議第五期会員選挙の開票が十一月二十二日(日)東京上野の同会議室で行われ、同会議選挙管理会総会で第二部と第三部の開票の結果が発表されたが、本学から立候補していた法学部中谷敏寿教授が第二部(法律学、政治学)に、経済学部森川太郎教授が第三部(経済学、商学、経営学)にそれぞれ

安田、高木、井上各教授に

博士号授与

商学部安田信一、経済学部高木秀玄、文学部井上吉次郎各教授は、かねてそれぞれ所属の本学学部で論文を提出して博士号を請求していたが本年七月の各教授会でパスし、十月十四日付(文部省)を以て安田、高木両教授に経済学博士号、井上教授に文学博士号がそれぞれ授与された。

なお、博士号授与式は、十一月五日千里山大学ホールで行われ、本学役員、各学部長、各主査出席の下に学長より三博士に学位記が授与された。

安田、高木、井上各博士の略歴及び論文題名左の通りである。



安田博士

昭和十四年関大経商学部経済学科卒
二商教諭、関甲講師、昭和二十一年関大専門部助教授、教授、同第二部厚生課長、同学生部長、同二十三年関大助教、教授、同二十六年商学部次長、同三十二年在外学術研究員、補導主事、同三十二年商学部長、学内協議会協議員(授与学位) 経済学博士(論文題名)

「経済成長・発展と産業構造」



高木博士

昭和十六年関大経商学部経済学科卒、本学統計学研究生、同十八年本学講師、助教授、専門部生徒主事、同第二部学生



井上博士

課長、同二十三年教授、学生部次長、同二十六年経済学部次長、同部長代理、同二十九年在外学術研究員(授与学位) 経済学博士(論文題名)

「統計と推計の理論」

大正五年東京帝国大学文科大学哲学科社会学部修了、昭和九年毎日新聞調査部長、学芸部長、出版編集部長、同十六年毎日新聞出版局長、編集参事、副主事、同二十一年新大阪新聞主筆取締役、同二十三年編集顧問、同二十四年関大教授、員外教授、経済政治研究所長(授与学位) 文学博士(論文題名)

「社会交通と文化交流に就いての社会学的考察」

れ当選した。

上田専任講師帰学

シカゴ大学大学院奨学生として、昨年十月渡来した上田昭三専任講師はシカゴ大学スクール・オブ・ビジネスにおいて主としてシニワイガー教授に師事して「アメリカにおける消費者信用の問題」

を研究し、十一月二十四日山下汽船「やまひめ丸」で無事帰学した。

人事異動

昭和三十四年十一月十八日付

教授 金子又兵衛

任期満了につき大学院文学研究科幹事を解く

昭和三十四年十一月十九日付

大学院文学研究科幹事を命ずる 教授 末永 雅雄

本学顧問、元学長であつた法学博士
神戸正雄先生が、さる十月十六日午前
一時京都市中京区河原町夷川の自宅で
胆石病のため逝去された。八十二。

先生とわが関西大学との縁はずいぶ
ん古い。先生が明治三十五年京都大学
助教授、同四十年教授になられて間も
なしで当時夜間学校であつた福島学舎
に講師として財政学を講じられたのに
はじまる。昭和十四年四月、定年で京
都大学を退職されると同時に、碩学仁
保亀松博士の後を受けて本学学長に
就任、同十九年三月まで満五カ年学長
の職にあつた。その間大正九年に大阪
中央公会堂で開催した創立三十五周年
記念講演会には雪嶺三宅雄二郎博士ら
と共に講師に、また昭和十一年に同じ
く中央公会堂で開いた創立五十周年記
念講演会には「日本経済の強みと弱み」
と題して、矢野仁一博士らと共に出講
されたものである。

神戸先生が学長になられた当時のわ
が国は、満州事変から日華事変に移行
する軍拡一辺倒の時代で、学生の軍事
教練は強化され、銃を執る教練のあい
間には、来る日も来る日も軍器工廠や
軍需工場へ集団勤労奉仕、シヤベルを
手に防空壕ほりなどの明け暮れで、戦
況悪化すると共に、政府ならびに軍部

の戦時非常措置方策によつて文科系学
生定員の縮小、卒業期の繰りあげ、文科
系大学の徴兵猶予の特典の停止で、多
数の学徒出陣となつた。学舎は兵舎に
転用され、在学生六千を越した本学も
十九年には三千名に満たぬ現状で、四
十五名あつた教授、助教授も過半数の
二十三名を解職し、本学史上未曾有の
大量整理が行われ、整理が一段落を告
げると共に自らも責任をとつて解職さ



神戸正雄先生を偲ぶ

神屋敷民蔵

れた。

「関西大学七十年史」に「神戸正雄
が学長に就任した早々に日華事変が
勃発している。爾来七カ年彼の学長
在任の期間は戦時の最も困難な時代
であつた。彼はこのような時代にあ
つて、よく本学を統理し、政府並び
に軍の無用の干渉を斥け学園の自主
性を守るとともに、本学の動向につ
いても細心の注意を払い穩健中正な
指導を行つてきた。彼の在任中の最

大の出来事は学徒出陣、学園の縮小
等であつた。彼は老眼鏡を涙にくも
らせて翔いてゆく若鷺の群を見送
り、また大量の教員を整理しなけれ
ばならなかつた。まことに悲運の学
長であつた」と記している。

神戸先生の学長在任中は校友会会則
のきまりで会長を兼任された。当時の
大学は十数年にわたつて理事者の専制
がつづいたところで、校友会活動もよう

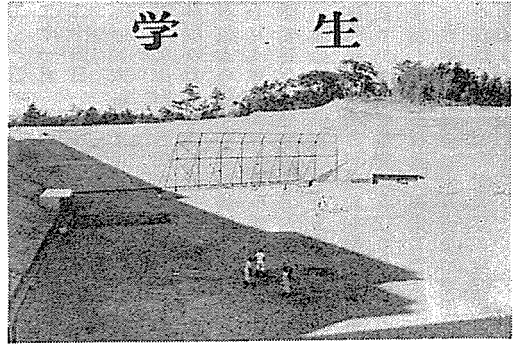
井、金沢、富山の支部総会などへ先生
を煩わしたものであつた。

神戸先生が学長兼任の年四月に関西
工業専門学校が開校したが、同学長の
努力功績は大きい。辞任の直前の三月
十九、二十日の両日、自ら文部省に赴
いて奔走につとめた結果、同二十日付
で設立の認可が下りたのである。

終戦後の昭和二十二年四月、第一次
公選の京都市長になり、同年十一月全
国市長会の会長、同二十四年市長退職
同年地方行政調査委員会会長、同二
十八年文化功労者賞受賞、業績として
論文は日本文のもの数知れず、独文の
もの十、英文のもの二十五、著書は独
文三、日本文五十六、わが国財政学者
として学界に貢献せられるところま
くに大なるものがあつた。

十月十八日先生ゆかりの京都大学経
済学部第七教室で行われた告別式には
白菊に飾られた遺影を中心に、京都大
学、関西大学、京都府、京都市からお
供えの白菊の花輪のほか一切の供花は
辞退され、高潔であつた先生にふさわ
しい簡素清純な告別式で、折りから秋
雨そぼふるなかを先生ゆかりの人々多
数参拝して追慕一入であつた。

(校友会事務長)



「学生相談室」室報発行について

学生相談室が、昭和三十二年四月に発足して以来、相談室をもつと一般に周知させるため、機関紙の発行が計画されていたが、漸くその機が熟し、大学祭当日を期して発刊した。

原稿は相談室委員の各教授に依頼したところ多数投稿があり、編輯子が嬉しい悲鳴をあげていた。予算の関係でタイプロイド六頁建が四頁になった。

室報は不定期刊であるが、現代学生がその勉強条件に数多くの問題を持つているのに、その解決の場を持つことが余り少ないことは学生を更に悪い条件に追い

やることで、少しでも良い勉強条件を整えることに学生相談室が努力を重ねていることを一般に周知させることを目的としており、今後室報が更に充実し、同時に相談室がその役割を充分に果たす一助になることを願っている。

陸上善勝

対法大戦

第三十六回関大対法大陸上競技定期戦は、十一月三日神戸市立グラウンドで行われ、双方共熱戦に終始したが、百、四百、千五百、五千、走幅跳、走高跳等各種目に善戦し、結局左の戦績で勝を制した。

○戦績 関大 90 1 81 法大
○大会新 馬場(関大) 50秒0
○対校成績 関大 20勝 7敗

優勝逸して二位

野球リーグ戦

関西六大学野球リーグ戦も終盤戦に入つた十一月七、八両日に亘り日生球場で優勝を賭けて行われた関関戦で、第一戦4-1、続く第二戦も13-1と大敗して惜しくも優勝を逸し、第二位にとどまつた。

なお秋季の戦績左の通り。

京 神 同 立 関 学						率 点 分 勝 試					
関学	⑤	2	2	2	2	2	10	10	0	5	1.000
関大	0	⑤	2	1	2	2	11	7	0	3	.636
立命	0	0	⑤	2	1	2	11	6	1	3	.600
同大	0	2	0	⑤	1	2	12	6	1	3	.545
神大	0	0	0	0	⑤	2	13	2	2	1	.182
京大	0	0	0	0	0	⑤	13	1	2	0	.091
敗 数						0	4	4	5	9	10
小数字引分											

対関学戦に勝利

関西大学ラグビー

関西大学対抗ラグビーの関関戦は十月二十五日花園ラグビー場で行われ、前年関学にリードされたが後半逆転して対関学戦に初の勝利と勝ち得た。

ホッケー三連勝

関西学生ホッケー一部秋季リーグ戦優勝は、最終日の十一月三日大阪府部競技場で、関大対関学で行われ、善戦よく関学を敗つて三連勝を遂げた。
なお、十一月十日平塚市横浜ホッケー場で行われた全日本学生ホッケー選手権大会では準決勝に明大と対戦して、奪戦むなく敗退した。

関西学生米式蹴球リーグで二位

関西学生アメリカン・フットボール秋

季リーグ戦は、十月四日から十一月一日まで、西宮球場で行われたが、関大は最終戦で京大を破り、二位となった。

初優勝なる

六人制バレー

関西学生六人制バレー・ボール秋季優勝大会は、十一月八日午前十時から、神戸商大体育館において行なわれ、決勝で関学を2-0と敗り、見事、初優勝を遂げた。

決勝

関大 2 (1515 1111) 0 関学

2位を獲得

関西学生バスケット・リーグ

関西学生バスケットボール秋季リーグ戦は、阿倍野体育館で九月十九日から十月十八日まで一カ月間行われたが、関大は最終日立命大に勝つて2位になった。

リーグ成績次の通り
①同大 9勝2敗 ②関大 8勝5敗 ③関学 8勝5敗 ④甲南 6勝6敗 ⑤立命 6勝3敗 ⑥神大 1勝10敗

秋季リーグで三位

バレーボール

バレー・ボール関西学生秋季リーグ戦は、十月十八、二十四、十一月一日の三日間、市立中央体育館などで開かれ、熱戦の結果、2勝3敗で本学は三位になった。



校 友 バ ッ ジ

校 友

校友会の動き(十月)

- 一 日 大東支部発会式
- 二 日 和泉支部発会式
- 三 日 松原支部発会式
- 四 日 富田林支部発会式
- 五 日 部長会
- 六 日 事業組織合同部会
- 七 日 常議員会
- 八 日 代議員会
- 九 日 支部結成完了記念祝賀会
- 十 日 文芸講演会
- 十一 日 部長会
- 十二 日 広報部会
- 十三 日 校友会総会

大東支部発会式

大東市内に居住する校友に対する本部からの大東支部結成のゆきかけによつて発起人の間で準備が進められていたが、十月一日午後七時から野崎観音前の魚捨楼で発会式を挙げた。

開会のあいさつで始まり、出席会員の自己紹介のあと、堤氏を議長に選出してまず会則案を逐条審議して、承認を得て決定したのち役員を選出した。

本部から出席の大月会長が支部の発会を喜びあいさつし、大学の現況や当面の問題について説明した。

支部長に選任された竹谷氏の就任あいさつがあつて議事を終り、閉会後懇親会に移り、午後十時無事閉会した。

当日決定役員

支部長 竹谷謙貴

副支部長 赤野正男、青野昌平

会計監査 西村泰雄、堤 健次

なお、支部事務所は大東市四条中垣内八〇六・支部長宅におかれる。

和泉支部発会式

和泉市内でも和泉支部結成の動きが本部からの結成促進運動と相まつて準備が進められていたが、十月三日午後三時から和泉消防署ホールで発会式を行った。

この日は若い校友を中心に約三十名の出席があつたうえ、来賓として横田和泉市長を迎えて、薄川氏が開会のあいさつをのべたあと、発起人を代表して西口氏から設立経過報告が行われた。

次いで本部から出席の榎本副会長、金本組織副部長から大学、校友会の現況説明、横田市長からも祝辞がのべられた。

北川氏を議長に議事にはいり、会則案を逐条審議のち決定し、三十才以上の会員が選考委員になつて役員を選出。支部長に選出された西口氏のあいさつで議事を終り、懇親会を開いて午後七時、無事に閉会した。

当日決定役員

支部長 西口喜一郎

副支部長 山本利治、溝川一清、北川照敏

顧問 佐野 浩

相談役 森田弥太郎、横田磯治(市)

(長)

なお、支部事務所は和泉市肥子町四七・支部長宅におかれる。

松原支部発会式

松原市内の松原支部結成準備も発起人の間で着々と進められていたが、十月四日午前十一時から松原市公民館で発会式を行った。

この発会式には大学から桜田教授も出席、「憲法と国際法」と題する講演があり好評であつた。本部からは榎本副会長、門上組織部長、金本組織副部長らが出席、発起人から設立経過報告があり、会則案審議決定のち、役員を選出して議事を終了した。来賓のあいさつなどあつて、最後に懇親会を開いて、会員相互の親睦を深めて無事発会式を終えた。

当日決定役員

支部長 矢野芳雄

副支部長 西田正治、松本明夫

幹事長 大江利正

なお支部事務所は松原市向井町・支部長宅におかれる。

富田林支部発会式

十月四日、松原支部の発会に続いて、午後二時から富田林支部発会式が同市内の「弘楽」で開催された。

この日は二十五名が出席、本部から出席の榎本副会長、門上組織部長、金本副部長らを加えて始められ、最初に一同で学歌を斉唱後、議事にはいり、発起人から支部設立経過報告があり、会則を決

定、支部長ほか役員を選出した。

支部長に就任の万谷氏のあいさつがあり、本部側榎本副会長らの祝辞と現況説明、会員からも支部活動に対する積極的な意見がのべられて議事を終了した。

一同の親睦会に移り、和やかに話に花を咲かせ閉会した。

当日決定役員

支部長 万谷楠雄

副支部長 関田政雄、大和英雄

幹事長 高谷誠三

なお、支部事務所は富田林市喜志三二一〇・支部長宅におかれる。

常 議 員 会

校友会では総会を控え、十月十日午後一時から大同ビル八階会議室で常議員会を開催。

総務部の司会で始められ、大月会長のあいさつのもと各部長から各部事業報告が行われた。次に本年度校友総会開催の件を討議、総務部会、部長会の原案通り十月二十四日に開催することを正式に決定。また支部設立承認の件は、支部結成運動で続々誕生した各支部について、組織部長から報告説明があり、いずれも承認された。また推せん校友に推せんする件では推せん支部長の説明に質疑応答のすえ、大学理事会へ推せんすることに決定した。最後に大月会長から会則改正の件につき提案理由が説明され、ひきつづいて開かれる代議員会に会則改正の件を上提することを承認して閉会した。

代 議 員 会

常議員会に続いて十月十日午後二時から大同ビル八階大ホールで三百人の出席を得て代議員会が開かれた。

総務部の司会で始められ、大月会長の開会あいさつに続いて来賓矢口学長、久井専務理事からそれぞれあいさつ、各部長から事業報告があり、財務部長の前年度決算報告と監事を代表して梅原氏から監査結果報告があつた。

議事にはいり、本年度総会開催の件を常議員会の決定通り承認、会則改正案を本年度総会に上提することを認め、全議事を終了、閉会した。

支部結成完了記念祝賀会

校友会では大阪府内の支部結成運動が完了したのを記念して、各支部長ほか支部関係者ら約三百人の参集を得て、代議員会に続いて午後三時から大同ビル大ホールで祝賀会を開催。

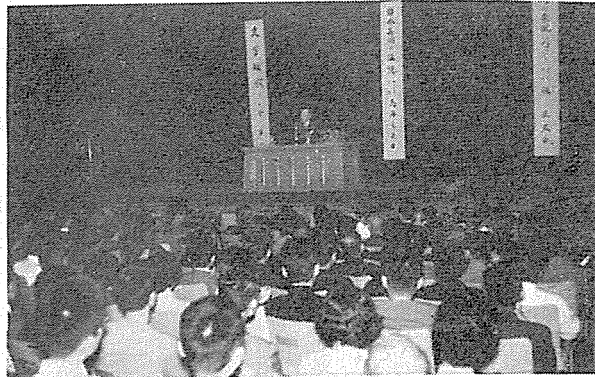
寺西組織副部長の司会で始められ、門上組織部長が開会の言葉をのべ、支部設立運動の完成にいたる経過を説明報告。次に大月会長から支部完成とその発展に尽力した各支部の役員に感謝の言葉をのべた。

来賓の祝辞に移り、理事長を代理して久井専務理事が、また、矢口学長も学長就任のあいさつをかねて支部結成完了に祝辞をよせた。

司会者から各支部役員の紹介が行われ、最後に支部を代表して一番最後に結成された富田林支部長・万谷氏があいさつし、完成されたこの組織を通して母校

と校友会の発展に寄与したいとその抱負をのべた。

榎本副会長のあいさつで祝賀会を終り、記念の祝宴に移り、支部役員はたがい親睦を深め、盛大に祝賀会を閉じた。



文 芸 講 演 会

校友会では支部結成完了を記念して文芸講演会を計画、十月十日午後五時から大阪中之島・朝日会館で千七百にのぼる満員の聴衆を得て開催した。

最初、黒部川第四発電所用ダム工事を記録した文化映画「地底の凱歌」が上映された。

映画が終つて主催者を代表して大月会長、大学を代表して矢口学長からあいさつ後講演に移つた。聴衆は各講師の講演

大 盛 況 の 文 芸 講 演 会

文芸講演会

10月10日 土 午後五時

大 阪 中 之 島 朝 日 会 館

映画 地底の凱歌

二つの象徴について

日本美術の伝統

文学雑感

来賓歓迎 主催 関西大学校友会

入場無料 協賛 法政大学 関西大学

に熱心に耳を傾け、大好評裡に午後九時無事閉会した。

講師と演題は次の通り

「二つの象徴について」 関西大学教授 堀 正人氏

「日本美術の伝統について」 独立美術協会会員 鳥海青児氏

「文学雑感」 作家 今 東光氏

校 友 総 会

昭和三十四年度校友総会は、十月二十四日午後一時から千里山第三学舎講堂で約三百名にのぼる会員の出席を得て開催された。

開会に先だつて応援団プラスバンドの演奏が行われ、総会ではここで榎本副会長の開会の辞ではじまり、大月会長のあいさつ、ついで神宅理事長、矢口学長、阿部評議員会議長から祝辞があつた。次いで久井専務理事から大学の現況報告後、各部長の事業報告に移り、寒川総務部長、村上事業部長、林広報部長、門上組織部長からそれぞれ事業報告が行われ、西村財務部長からは昭和三十三年度決算が報告され、承認された。監事代表梅原貞治



本年度校友総会（第三学舎講堂）

郎氏から監査報告があつた。ここで大月会長を議長に会則一部変更の件を上提、総務部長から提案理由の説明があつたのち、満場一致で承認された。議長が榎本副会長と交替、役員選考の件にはいり、選考委員によつて協議された結果、新会長に大月伸氏を再度推すことを選考委員代表西本寛一氏から報告されて満場の拍手で会長が決定した。また代議員選考については総会席上では無理なため会長に選考委員選出を一任し、その選考委員会で協議して行くことになった。

昭和35年度 關西大学入学試験概要

学 部	(一部)		(二部)		(出願期間及び試験日)		出 願 期 間	試 験 日
法 学 部	{ 法 律 学 科 政 治 学 科 }	400名	300名					
経済学部		400名	300名	地 方 試 験 (高松, 福岡, 広島, 金沢, 名古屋各地)				
文 学 部	{ 英 文 学 科 国 文 学 科 哲 学 科 独 文 学 科 文 学 科 史 学 科 新 聞 学 科 東 洋 学 科 }	300名	150名	(一部全学部)…昭和35年1月19日~2月15日	2月19日	2月21日		
				法 学 部…	2月18日	2月21日		
				商 学 部…	2月19日	2月22日		
				文 学 部…	2月20日	2月23日		
				経 済 学 部…	2月20日	2月24日		
商 学 部		400名	150名	工 学 部…	2月22日	2月25日		
工 学 部	{ 機 械 工 学 科 電 氣 工 学 科 化 学 工 学 科 金 属 工 学 科 管 理 工 学 科 }	400名	(申請中)	(試験科目)				
				法・経・文・商学部…国語、英語、社会、数学 (簿記)				
				(二科目選択)				
				工 学 部…理科(物理、化学の中の一科目)、英語、数学				

大学院

博士課程	法学研究科 { 公法学専攻 }	10名	(出願期間)
	文学研究科 { 国文学専攻 }	4名	昭和35年3月1日~3月26日
	経済学研究科 { 金融経済・経済史専攻 }	3名	(試験日)
修士課程	法学研究科 { 公法学専攻 }	60名	昭和35年3月30日、31日(2日間)
	文学研究科 { 国文学専攻 }	60名	(試験科目)
	文学研究科 { 国文学専攻 }	60名	博士課程…主論文、副論文、外国語
	文学研究科 { 国文学専攻 }	60名	修士課程…論文、外国語
	経済学研究科 { 経済学専攻 }	50名	

なお、詳細については「昭和35年度關西大學學生募集要項」を参照して下さい。

關西大学文学会編 文学論集

昭和三十四年九月刊

第五九号卷

A5判

六一頁

自然科学特輯

鴨川における蛭状蚊虫類中間宿主

サカマキガイの分布調査について

翻訳機械について

橋田慶蔵

杉原弘人

關西大学文学会編 文学論集

昭和三十四年七月刊

第四九号卷

A5判

六四頁

独逸文学特輯

シラーとヘルダーリン

フランツ・カフカ：小品集「村医者」

— 散文の可能性について (その三) —

「群盗序文」の一考察

丸山三友

脇阪豊

高尾男